

滋賀医科大学（滋賀医科大学耳鼻咽喉科学講座）

沿革

国立滋賀医科大学は昭和 49 年 10 月に守山市の仮校舎に開学し、昭和 50 年 5 月に、大津市と草津市の南にある広大な丘陵地帯に大学と附属病院が完成した。昭和 53 年 4 月には耳鼻咽喉科学講座が開設され、京都大学から北原正章教授、齋藤春雄助教授、矢沢代四郎、松原秀春が着任し、同年 10 月に A 病棟（320 床）が開院した。開院時には北嶋和智講師、竹田泰三、北野仁が加わった 7 人体制で診療が開始された。その後、B、C 病棟が完成して 608 床となり、昭和 55 年に北野真由美、北野博也が入局し、昭和 56 年には滋賀医科大学第 1 期卒業生の児玉章、水上千佳司を迎え、以後は滋賀医大の卒業生を中心に若い人材が次々と育つようになった。



滋賀医科大学と琵琶湖・比叡山



基礎研究棟とヒポクラテスの木

平成 16 年 4 月には「国立大学法人滋賀医科大学」へ移行し、自立性のある運営が任されるようになった。開学 30 周年を機に、平成 17 年には病院再開発が決定され、平成 19 年に新たな D 病棟が完成し、平成 24 年までに A、B、C 病棟、中央診療棟、手術棟、外来棟の改修が完了した。平成 22 年からは電子カルテシステムが稼働した。平成 29 年からは臨床研究棟の改修工事が始まっている。

歴代教授



北原正章



北嶋和智



清水猛史

北原正章（昭和 53 年～平成 6 年）

北原教授は昭和 28 年 3 月に京都大学を卒業後、岩手医科大学助教授を経て、昭和 41 年から 2 年間、ルイジアナ州立大学（Irving M Blatt 教授）へ留学した。その後、京都大学助教授などを経て、昭和 53 年 4 月に滋賀医科大学耳鼻咽喉科学講座初代教授として着任した。北原教授は神経耳科を専門としていたため、耳鼻咽喉科学講座を新たに開設するにあたり、顔面神経・側頭骨外科を Schuknecht 教授のもとで学んだ齋藤春雄助教授に、頭頸部外科を一色信彦先生のグループで音声外科・形成外科を学んだ北嶋和智講師に依頼し、助手は竹田泰三、矢沢代四郎、松原秀春で、いずれも京都大学の優秀な人材で固めた。北原教授は、広く耳鼻咽喉科疾患の診療体制を整え、専門とする神経耳科学を教室のテーマとして基礎研究にも精力的に取り組み、多くの耳鼻咽喉科医そして研究者を育成した。昭和 56 年には「メニエール病の基礎と臨床」のテーマで日耳鼻宿題報告を行った。その後、齋藤助教授は高知医科大学に教授として転任し、竹田講師は助教授として赴任した後、齋藤教授の後を受けて教授に就任した。その結果、教室では北嶋助教授が頭頸部外科を、矢沢講師が側頭骨外科を担当した。平成 22 年春の叙勲では瑞寶中綬章を受章した。

北嶋和智（平成 6 年～平成 13 年）

北嶋教授は昭和 41 年に京都大学を卒業後、昭和 48 年から 2 年間のニューヨークのレノックスヒル病院音声研究室留学などを経て、昭和 53 年の開院時に講師として滋賀医科大学耳鼻咽喉科に着任した。その後助教授を経て、平成 6 年 4 月に北原教授の定年退官の後を受けて教授に就任した。講師、助教授そして教授として計 23 年間にわたって、滋賀医科大学耳鼻咽喉科における、外来・入院診療と手術、学生の指導と後進の育成に努めた。また、専門とする音声外科学を中心に大学院生の研究指導にも尽力し、当教室における臨床・教育・研究体制の確立に多大な貢献をした。直腸癌のため手術・抗がん剤治療を受けながら、平成 12 年 11 月には第 45 回日本音声言語医学会、平成 13 年 3 月には第 13 回日本喉頭科学会を主催し、平成 13 年 10 月 8 日ご逝去された。享年 59 歳。この間は北嶋先生の真摯で温厚なお人柄に惹かれて入局者も多く、多くの人材が育った。平成 13 年 11 月には北野博也講師が鳥取大学に教授として赴任した。

清水猛史（平成 16 年～現在）

清水教授は昭和 58 年に三重大学を卒業後、昭和 63 年から 2 年半、ノースカロライナの米国環境衛生科学研究所（Paul Nettesheim 教授）に留学した。その後、三重大学附属病院中央手術部の講師、助教授を経て、平成 16 年 2 月に滋賀医科大学耳鼻咽喉科に教授として着任した。同年 4 月に始まった卒後臨床研修の影響で、着任後しばらくは入局者がなかったが、その後は着実に入局者が増えている。嚥下外来や、嗅覚味覚外来、睡眠外来、アレルギー外来など、時代の要望に合わせて新たな専門外来を充実させ、最新の耳科手術や鼻内視鏡手術、頭頸部癌手術の導入・発展に取り組んでいる。専門とする上気道の免疫

アレルギー学を教室のテーマとし、着任早々に研究室を改装して研究体制を整え、基礎研究にも精力的に取り組み、多くの耳鼻咽喉科医そして研究者を育成している。

人事

助教授・准教授

齋藤春雄（昭 53.4～昭 59.7）、北嶋和智（昭 59.11～平 6.3）、矢沢代四郎（平 6.8～平 16.3）、大脇成広（平 27.3～現在）

講師

北嶋和智（昭 53.10～昭 59.10）、竹田泰三（昭 56.12～昭 61.1）、矢沢代四郎（昭 59.11～平 6.7）、北野仁（昭 61.1～平 2.5）、児玉章（平 5.6～平 8.4）、北野博也（平 7.1～平 13.11）、鈴木幹男（平 11.12～平 17.3）、花満雅一（平 16.11～平 19.1）、大脇成広（平 21.5～平 27.2）、神前英明（平 23.4～現在）、小河孝夫（平 27.12～平 29.11）、戸嶋一郎（平 29.12～現在）

臨床・研究

北原正章教授は神経耳科学を専門とし、体平衡の生理と病態の研究に取り組むとともにこの領域の疾患を速やかに上手に治すことを心がけた。「メニエール病の研究」では両側メニエール病を難病ととらえ、イソソルビドの導入、内リンパ嚢外壁翻転法の開発など進め昭和 56 年の第 82 回日本耳鼻咽喉科学会総会では「メニエール病の基礎と臨床」をテーマに宿題報告を担当。昭和 61 年からは厚生省特定疾患「前庭機能異常」調査研究班班長（5 年間）を委嘱された。「耳鳴分野の研究」では新しく考案した耳鳴測定器などを用い、医学・心理学・社会学を駆使した総合的治療法を確立した。教室の耳鳴治療法は海外の医学書、患者向け季刊誌にも広く紹介され、平成 2 年には国際耳鳴セミナーの Advisory Board に選出された。平成 4 年以降は独自の防音気圧装置（気圧チャンバー）を用い耳疾患の診断、治療効果の向上に努めた。これらの成果は単著「メニエール病の基礎と臨床、同文献集、教室出版 1981」、編著「TINNITUS Pathophysiology and Management, Igakushoin 1988」、「Meniere's Disease, Springer Verlag 1990」、「耳鳴、金原出版 1992」として出版した。教室在任中の業績は「耳と大気圧、教室出版 1994」、「Neurotology Update Papers Commemorating the 15th Anniversary of the Department of Otolaryngology under the Chairmanship of Professor Masaaki Kitahara at Shiga University of Medical Science, Scandinavian Univ. Press 1994」の 2 編に総括刊行された。平成 18 年には日本めまい平衡医学会より功労賞を受賞した。

北嶋和智教授は音声外科学を専門とし、病的音声の機能評価法に関する研究を臨床応用し、喉頭疾患の診断や治療効果の判定に利用できる方法を見出した。また、音声の基本周波数調節における声門上下圧差の影響を明らかにするなど、大学院生の研究を指導しながら

ら、一連の音声研究を発展させた。臨床では喉頭癌をはじめとする頭頸部悪性腫瘍、口唇口蓋裂などの奇形、顎顔面外傷の手術などを通して、医局員の育成と地域医療に大きく貢献した。平成 10 年には第 23 回日耳鼻医事問題セミナー、平成 12 年には第 45 回日本音声言語医学会、平成 13 年には第 13 回日本喉頭科学会を主催した。

清水猛史教授は上気道の免疫アレルギー学を専門とし、「上気道炎症の病態とその制御」を研究テーマに、粘液産生と杯細胞化生、気道上皮細胞の再生と分化などの研究で国際的に高い評価を得た。滋賀医科大学着任後は「好酸球性鼻副鼻腔炎の病態解明」を目指して、組織リモデリングの機序、凝固線溶系因子の役割、好酸球と鼻粘膜構成細胞の相互作用、自然免疫の役割、アラキドン酸代謝、などをターゲットにした新たな治療法の開発に取り組んでいる。平成 21 年には清水志乃が気道炎症における凝固因子の役割に関する一連の研究で第 16 回日本鼻科学会賞を受賞した。平成 19 年からは神前英明、瀬野悟史、戸嶋一郎が継続して Mayo Clinic アレルギー部門（紀太博仁教授）に留学し、上皮由来のサイトカインである TSLP, IL-25, IL-33 など上気道炎症における自然免疫の研究を発展させた。平成 29 年に神前は好酸球性鼻副鼻腔炎におけるプロテアーゼの役割に関する研究で、第 1 回奥田記念財団学術賞を受賞した。戸嶋は 2 型自然リンパ球の研究を行い、小河孝夫は嗅覚味覚外来の臨床と嗅覚の基礎研究を進展させ医師主導型の臨床研究を行っている。その他、マクロライドの新たな抗炎症作用、アレルギー性鼻炎における自然免疫の役割、舌下免疫療法的作用機序、などの研究を通して、多くの大学院生を中心に活発な研究活動を行っている。平成 24 年には第 30 回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会、平成 29 年には第 5 回日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会、平成 30 年には第 44 回全国身体障害者福祉医療講習会を主催した。

学会・研究会担当

第 40 回日本平衡神経科学会（昭 56.11）

厚生省特定疾患前庭機能異常調査研究班総会並びに研究会
（昭 61.8, 昭 62.2, 7, 昭 63.2, 8, 12, 平 1.7, 12, 平 2.8, 平 3.2）

第 50 回耳鼻咽喉科臨床学会（昭 63.6）

Kyoto Satellite Meeting of CORLAS（昭 63.10）

Kyoto Satellite Meeting of the Barany Society（平 2.6）

第 23 回日耳鼻医事問題セミナー（平 10.6）

第 45 回日本音声言語医学会（平 12.11）

第 13 回日本喉頭科学会（平 13.3）

第 30 回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会（平 24.2）

第 5 回日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会（平 29.9）

第 44 回全国身体障害者福祉医療講習会（平 30.5）

教室刊行物

北原教授時代に宿題報告メニエール病の基礎と臨床、同文献集、滋賀医科大学耳鼻咽喉科学教室誌（第1集～第3集）、耳と大気圧、北嶋教授時代に滋賀医科大学耳鼻咽喉科学教室医局だより（Vol. 1～Vol. 3）、清水教授になってからは、同門会誌「和」（第1号～第6号）を2年に1回刊行している。